

文化

も様々な人が現れる作品。2020年度に愛知県芸術劇場小ホールで上演される予定。



一般公開審査会

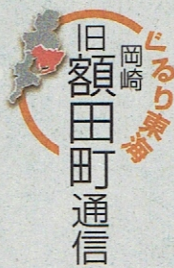
側も舞台空間でイノベーシ  
起こさねばならず、大変だ  
も面白く」 (千葉書)

# 循環型の環境取り戻す

## 森林保全のプロジェクト



①「奏林舎」の唐沢晋平さん。唐沢さんの薪は、西三河や名古屋で人気の石窯パン屋でも利用されている＝愛知県岡崎市千万町町  
②小原木材の小原淳社長。額田産の木材は、愛知県岡崎市中心部に新設される人道橋にも使われる＝同市針崎町



### 旧額田町通信

愛知県旧額田町(現・岡崎市)は面積の9割近くが森林。植林された杉やヒノキなどが多くを占める。植林から半世紀以上が経ち、「収穫期」を迎えているのに、切られずに放置されたままの木も多く残る。額田の山林は戦後の復興需要もあり、積極的に植林が進められた。だが、木材の関税撤廃で1970年代に安価な外材が市場に流入。さらに生活様式の変化で木材自体の需要が落ち、林業は衰退した。

間伐されないままだと、葉が邪魔をして太陽光が地表まで届かず、植物が育たずに保水性が落ちて土砂崩れの原因になったり、水質に影響したりする。額田の間伐は主に岡崎森林組合が手がけている。そんな中、自分たちでも取り組むようと、岡崎市千万町町の唐沢晋平さん(34)は間伐などの森林整備を担う一般社団法人「奏林舎」を2018年3月に立ち上げた。岡崎市に隣接する幸田町出身。14年8月、千万町町に移住してきた。間伐した木は、丸太や薪として販売している。

「山の資源を生かせれば、地域雇用にもつながれる」と唐沢さんは将来を見据える。「これは市民の飲み水の水源を守る活動でもある」

「小原木材」(岡崎市針崎町)は、岡崎森林組合や奏林舎などから額田の木材を仕入れ、販売している。社長の小原淳さん(67)は01年、日本に輸入される木材の産地の一つ、ポルネオ島の伐採現場を見た。100歳近い原生林が刈られ、ひとたび自然を破壊すると、元に戻すには時間がかかるだろうと想像した。

02年に社長に就任し、自社で扱う木材を徐々に国産材にシフトさせてきた。輸入材と比べて地元産材は割高だが、耐火性や防腐性を高める処理をし、付加価値を付けて販売している。

小原さんは、人工林の高い所にある奥山で、自然林の再生にも取り組んでいる。12年、市から旧額田町東部の山林13・5haを借り受けた。人工林を伐採し、在来種のドングリの苗を植えている。成長して落葉すると、地面に日が差し、土に栄養も戻って土に長年埋もれていた自然林の種が芽を出すという。

「自然の森に戻して、森本来の循環型の環境を取り戻したい」。この取り組みは「天使の森プロジェクト」として行政や地元の子どもたちも参加している。

(大野晴香)